

中島敦と朝鮮

— 「巡査の居る風景」を中心に —

李 月順

1. はじめに

『現代日本文学年表』¹⁾にそって、日本の代表的小説を見ると、朝鮮を舞台とする小説、朝鮮人を主人公とする小説は、極めて少ない。明治時代にはわずかに実録風の物語として、1882年のくだりに、渡辺文京『朝鮮変報録』、岡本湖目『朝鮮異聞』、岡本良策『朝鮮暴動実記』、しばらくして、1911年に俳人高浜虚子の随筆小説『朝鮮』があり、大正時代には何もなく、昭和に入って1931年に前田河広一郎の実録小説『朝鮮』がある。1932年に、朝鮮生まれで日本在住の作家・張赫宙(後の野口赫宙)の『餓鬼道』『追われる人々』、1933年に『権という男』、1934年に『ガルボウ』が出ているが、日本人作家が朝鮮人を小説のなかに登場させる例は、中島敦の「巡査の居る風景」(1929年)や『虎狩』(1942年)などを除いては、阿部知二の『冬の宿』(1936年)に見られる位である。

これらの文学作品に対する研究は、日本においては、在日の朴春日をはじめとして1960年代あたりから少なからず発表され続けている²⁾。

1990年代の日本近代文学研究のなかでは、日本の近代文学史を飾る錚々たる作家の作品に、「他者」としての外国人(朝鮮人や中国人)がいかに描かれているかを追及する研究や議論が数多く行われた。しかし、これらの研究のほとんどは、当時の日本の文学者がいかに朝鮮人を侮蔑的に描いているか、あるいは朝鮮人を日本人に比べて相対的に劣位に置いていたか、いかに隣人を見る目を持っていなかったか、という点のみが強調されている。その故か、中島敦という人物や文学作品に対する研究が、日本国内でかなり高い関心のもとに行われているにもかかわらず、朝鮮・朝鮮人を描いた中島敦の作品は

ほとんど論じられていない³。

中島敦は、思春期の一番多感な時期を日本植民地支配下の朝鮮という異民族の環境の中で過ごしている。そして、その体験をもとにして作品を書いている。中島敦が朝鮮での経験をもとに書いた作品は、単なる植民地の風景や風俗を描くことにとどまらず、日本の植民地支配が作りだした状況の中で生きていく朝鮮人の内面や心理にまで踏み込んでいる。しかしながら、中島敦という人物や文学作品に対する研究のなかで、南島体験に関しては、ポストコロニアリズムやオリエンタリズムの観点から多くの研究がされているが、彼の朝鮮体験とその体験をもとにして書かれた作品に対しては意図的かどうか、研究がほとんどされていない。だが、中島敦の朝鮮に関する作品についての研究は、中島文学、そして中島敦を深く理解していくうえで欠かせない、重視すべき研究だと思われる。そこで、本稿においては、中島敦の朝鮮を舞台とし、朝鮮人を描いた作品—「巡察の居る風景」を中心に論じてみる。中島が当時の朝鮮と朝鮮人をどういう風に描いているのかについての詳しい分析を通して、彼の初期作品の創作方法、そして当時彼の朝鮮と朝鮮人に対する視線、彼の日本植民地支配に対する考え方について探ってみる。

2. 中島敦の生涯と朝鮮との関係

近代以後に、フィクション・ノンフィクションを問わず、朝鮮と朝鮮人を題材にして作品を書いた、日本の作家を、大体三つの部類に分けることができるだろう。一つ目は、朝鮮を短期間旅行して、その印象を紀行文などの形式で書いた作家、例えば、夏目漱石、井伏鱒二、高浜虚子など。二つ目は、敗戦前まで、当時植民地である朝鮮で長い間生活をした経験がある作家、例えば、湯浅克衛、小林勝、田中英光、森崎和江など。三つ目は、朝鮮に住んだ経験も旅行したこともないが、日本国内に住んでいる在日朝鮮人との生活体験を通して朝鮮を描いている作家、例えば、井上光晴、開高健などがある。この区分に従うなら、中島敦は、二つ目の部類に属する。

まず、中島敦の生涯のなかで朝鮮との関係について調べてみよう。

中島敦の1933年(昭和8年)の作と推定されている「プールの傍で」に

は、次のような場面がある。

ある日、三造が妹と女中とで夕飯をたべてみると、父と新しい母とが外から歸つてきた。彼等は一緒に何か物を見に行つて、歸りに飯もすませて来たといつた。それを聞きながら、彼は妙に気持がとがつて来るのを感じた。何故妹を連れて行つてやらないんだ、と、彼は妹を愛してゐなかつたにも係はらず、とつさにさう思つた。明かに嫉妬であると彼は自分でも気がつき、気がついただけ餘計に腹が立つた。

彼等はみやげだといつて蒲焼のをりを三造に與へた。それがまた理由もなく彼の氣持に反撥した。彼は苦い額をして一口それを喰べた。それから、その残りを卓子の下にゐた猫に與へた。突然、父が黙つて立ち上つた。そして咽喉を鳴らしながら喰べてゐる猫を蹴とばし、三造の着物の襟を左手でつかむと、右手で続けざまに彼の頭を三つ四つ殴つた。

それから、はじめて、父は、怒りにふるへた声で、どもりながら叫んだ。

「何といふことをするんだ。折角、買つてきてやつたのに。」

三造は黙つてゐた。父はもう一度繰返した。息子はみにくく顔をゆがめながら強ひて笑つた。

「一度貰つた以上、それからはどう処分しようと、僕の勝手ぢやありませんか。」

激怒が再び彼の父を執へた。父は、その拳がいたくなる位、はげしく息子の頭を打つた。打つてゐる中に次第に病的な兇暴さが加つてくるのが、打たれてゐる三造にまで感じられた。彼は、しかし、少しも防がうとはしなかつた。むしろ打たれるのを楽しむやうな気持さへ何処かにあつた。彼は、それよりも、父が、彼の猫を蹴とばしたことに憤りを感じてゐた。明らかに、これは猫の関係したことではないのだ。

この蒲焼き事件は、中島敦一家が朝鮮のソウルで暮らしていた頃の出来事である。当時の中島敦の家庭環境、雰囲気がよく現れている場面である。

中島敦は1920年(大正9年)、11歳の時、父親が朝鮮龍山中学に転勤したの

をきっかけに父に従い朝鮮の京城（現ソウル）で、継母の下で生活する。最初は龍山小学校 5 年生に編入されたが、1922 年には龍山小学校を卒業、トップの成績で京城中学校に入学⁶し、1926 年に京城中学校を卒業する。

同じ龍山小学校、京城中学校の出身・山崎良幸の回想⁷によれば、「他とは違った感じの大変な秀才であった中島敦は、普通常識では計ることの出来ないもの、桁外れのものを持っていて、中学校時代、すでに人一倍、人間の苦しみや悩みを経験した」。

内地からの編入生としての寂しさと疎外感、家庭の不幸、そして、日本の植民地下の京城という特殊な社会環境のなかで、中島敦は、なんでも勉強しようという意欲と、いわゆる苦しんでいる下層階級の人達についても関心を持って観察する少年として成長したのである。

中島敦の京城での 5 年半は、近代日本が日露戦争に勝利し、日韓併合から 10 年たらずのうちに、急ピッチで植民地の制度化を進めていた時にあたる。中島が渡航する前年に、ソウルをはじめとした大規模の「三・一独立運動」が起り、朝鮮半島は不穏な状況にあった。にもかかわらず、強硬な統治政策は続行していた。植民地都市京城は朝鮮半島の重要な位置をしめ、軍事的に重要な拠点として、景観的にはより制度化されいちだんと日本色を強めていた。

京城の象徴である光化門に割り入ろうとする総督府の建物は統治において象徴的だったが、中島敦の京城在住期間は、この総督府が完成した 1926 年までだった。ともかく彼は「日帝時代」=植民地朝鮮の草創期にふれた少年だったことは確かである。

京城の人口総計は当時、25 万 1 千余り、うち、内地人（日本人）は 6 万 7 千ほど、外国人約 1 千 8 百、残りの 18 万 2 千 2 百ほどが被支配民族の朝鮮人だった。

中島親子が居を定めた龍山地区は、龍山駅に約 10 分、京城駅に 15 分位の所で、家は駅から 4、5 分の距離にあったが⁸、1904 年（明治 37 年）、軍用鉄道の京義線（京城—新義州）の始発地となってから、ますます発展した一帯であった。また、中島敦が京城にやって来た頃には、龍山を中心とする朝鮮軍事司令部が完備され、大陸の兵站基地の様相を強めていた。龍山小学校に

転入した中島敦は、朝鮮総督府立の京城中学校へと進む。その中学校の様子を、中島の同級生、浅湯克衛は、こう述べている⁹。

東の楼門からはいると、のちに野球場になった担々たる広庭がつづき、松森の山添いに、昔の宮殿がつづいている。(中略)

正面の、7、8メートルの丘から向うに柔道場、剣道場、右の山の中に図書館、左の森の中に、2棟の寄宿舎、その前の坂を下りると門衛の2、3人屯する、西洋式の鉄門があつて、守衛の溜りになっている、大きな交番のごときものがあつた。

「広庭」「柔道場」に「剣道場」そして、大きな交番のごとき「守衛の溜り」というような設備から、当時の格式高い植民地中学校の様子が伝わってくる。

京城中学校は、中島在学時で、学級数 19、生徒数 907。内訳は日本人 867、朝鮮人 39、つまり 4%程度の朝鮮人中学生を含んでいた¹⁰。両班以上の協力的な朝鮮人の子弟たちである。中学生中島敦の周囲には、同世代の学友としての朝鮮人たち、そして、「門衛」「守衛」に代表される大人の朝鮮人たちがいて異民族とじかに接する植民地に住む少年の日常があつた。

中島敦の朝鮮を舞台とした小説『虎狩』¹¹の登場人物—趙大煥は、「私＝三造」の京城中学校の時の同級生で、「私」を虎狩の冒険に誘ってくれる朝鮮人の生徒であるが、それにはモデルらしきものが存在する。

龍山小学校から同学年で、京城中学校では同級生だった山崎良幸は、こんな回想を残している¹²。

また『虎狩』の中で出て来る韓国人の生徒ですが、同級生で二、三人韓国の人がいました。あるいはモデルとは言えなくても、何かのヒントは得たかも知れません。その一人、趙君と言ったか、背の高いハンサムな、やさしくて大人しそうな生徒がいました。何でも名家の出で、母親は日本人だったのか、韓国人だとの感じはしませんでした。何処か隠鬱な印象でしたが、成績は優秀だったと思います。

成績優秀で、孤立した印象、名家の出というのは両班（ヤンバン、上層階級）の出身ということだろうから、その点で同級生の「趙君」は、「趙大煥」のモデルといってもおかしくない。別の京城中学校の同級生（伊東高麗夫）の回想もある¹³。

また『虎狩』中の同級生、趙大煥については、趙という柔道部にいた大きな男があるいはモデルだったかと思われます。なお金大煥という同級生もおり、趙大煥とはこの二人の同級生を合わせた名前だと言えます。

「柔道部にいた大きな男」と「背の高いハンサムな、やさしくて大人しそうな生徒」というのは、ちょっと印象が違うようだが、それほど矛盾しているわけではないだろう。「やさしくて大人しそう」な男と、柔道をやっているスポーツマンとは必ずしも両立しないわけではないからだ。「趙」と「大煥」という、二人の同級生の姓名を組み合わせて、主人公の名前を作ったというのも、ありがちなことと思える。

いずれにしろ、中島敦が実在の朝鮮人の同級生、「趙」と「大煥」という氏名から「趙大煥」という氏名を思いついたことは間違いないだろう。いわば、それは中島敦の周囲にいた、日本人社会の中で、肩身を狭くして「何処か隠鬱な印象」を与えていた複数の朝鮮人学生たちの集合名詞だったといってもよいだろう。『虎狩』のモチーフは、被支配民族のクラスメート・趙大煥が「私」の前から姿を消すという少年時代の痛覚を蘇生させるところにあって、植民地の少年が多く遭遇した事柄を呼び寄せる。日本人の学生に撲られ、「—どういふことなんだろうなあ。一体、強いとか弱いとか、いふことは。—」ともらず趙大煥の言葉は、そのまま植民地朝鮮の矛盾を突く言葉だった。中島敦は植民地京城において日常の存在として知る学生という存在（趙大煥）を描くことによって、被支配民族の煩悶を少年を主人公にして表現したのである。それは、中島敦の少年時代の経験から自然に生じた希求ではないだろうか。

「プールの傍で」によって回想されているのは、朝鮮人少女である娼婦と三造（私）との淡い交情である。支配—被支配の関係は年少者にも及ぶ。中島敦が作品上において現実の朝鮮との結節点を見出そうとする時、いずれの場合も苦

い認識を強いられる。この作品では、娼妓としての朝鮮人少女と日本人学生という、植民地人と被植民地人との淡い恋愛関係の中に、二人の置かれた政治的位置を透視させるという構成が見られている。

1926年4月、中島敦は京城中学校を4年で修了し、東京の第一高等学校に入学するが、1927年11月に「下田の女」が一高「校友会雑誌」に掲載される¹⁴。それからの15年の間、中島敦は数多くの作品を発表したが、朝鮮主題の作品は「虎狩」、「ブルの傍で」以外に「巡査の居る風景—1923年の一つのスケッチ」があるだけである。

3. 「巡査の居る風景—1923年の一つのスケッチ」¹⁵

「巡査の居る風景」は、昭和4年（1929年）6月、第一高等学校の『校友会雑誌（322）』に発表されたもので、「1923年の一つのスケッチ」という副題が添えられている。

1923年といえば、日本国内には関東大震災の起こった年である。都市の崩壊、ひきつづき朝鮮人虐殺を含めた事件の連続した年であるが、当時、21歳の青年中島は、日本国内ではなく、朝鮮の京城を舞台と設定して、そこに住む二人の朝鮮人—趙教英という巡査と娼婦の金東連の裡にこの1923年をみようとしたのである。

この作品について、渡辺一民は「関東大震災の朝鮮人虐殺から京城における独立運動まで、新感覚派の風の軽いタッチで作品のなかにとりこんだ「巡査の居る風景」には、中西伊之助の作品をのぞけば、朝鮮人をとりあげた同時代のプロレタリア文学者の作品にも見られない、朝鮮で生活し朝鮮人の運命を生身で感じたものだけが表現しうる何か脈打っている」¹⁶と高く評価している。

作品の舞台となっている京城は、総督府下朝鮮の首府、つまり植民地政策のお膝元であり、抗日運動の中心でもあった。そこには毎日想像も出来ない事が起きていたのである。

中島はこの小説で、主人公の内的ドラマを骨太にストーリーの中心に据えるという長編小説の方法を取るのではなく、スナップ風の場面の羅列がそのまま筋の展開となるような、まさに副題のごとく「スケッチ」風に、日本に

よる植民地支配を象徴する場面を幾つか点綴していく方法を取っている。

その幾つかの場面とは：

1. 電車の中で、日本人中学生が、趙教英が朝鮮人であることを知って傲慢な態度を取る場面
2. 電車の中で、日本人女性が朝鮮人学生に「ヨボさん」と声をかけて、憤激を買う場面
3. ある幼稚園での府会議員の選挙演説の場面
4. 日本の紳士から丁寧な扱いを受けた時の場面
5. 京城駅前での朝鮮総督暗殺未遂場面
6. 関東大震災の際、夫を亡くした、新米の娼婦金東連が夫の死因の真相を知らされた場面

職業柄、無賃乗車できる巡査の趙教英は電車に乗るといつも運転台の側に立つのであるが、そんな趙教英を不快にさせる出来事が起こる。一人の日本人中学生が電車に乗って来て運転台の側に立っていたので、運転手が運転の邪魔にもなるから奥に入ってくれるようにいう。すると彼は「オイ、其の人(趙教英のこと)を中に入れたいなら俺もいやだよ」と傲然と運転手に食ってかかる。巡査と運転手が日本人ではなく朝鮮人である故に日本人中学生は生意気な口をたたき、朝鮮人が当惑するのを楽しんでいるのである。

また別の電車では、粗末な姿をした日本人の女と、その前の吊革につかまっている白い朝鮮服をつけた学生らしい青年が言い争っている。

— 折角、親切に腰かけなさい、いふてやつたのに。 — と女は不平さうに言つて居るのだ。

— 併し、何だヨボとは。ヨボとは一体何だ。 —

— だから、ヨボさんいふてるやないか、

— どつちでも同じことだ。ヨボなんて、

— ヨボなんていやへん。ヨボさんといふたんや。

女には何にもわからないのだ。そして怪げんさうな顔付をして、他の人達の諒解を得ようとするかの様に、あたりを見まはして、

— ヨボさん、席があいてるから、かけなさいて、親切にいふてやったのに何をおこつてんのや。

車内には所々失笑の聲が起つた。青年はもう諦めて了つて、黙つて此の無智な女を睨みつけた。

巡查教英はこれを聞いて、またしても憂鬱になってしまう。そして彼はこう考える。

何故此の青年はあんな論争をするのだ。此の穩健な抗議者は何故自分が他人であることをそんなに光榮に思うのだ。何故自分が自分であることを恥ぢねばならないのだ。

朝鮮で「ヨボ」という言葉は、夫婦間（「あなた」の意味）、もしくは親しいもののあいだでのみ用いられた朝鮮語の二人称の呼称だが、政治による支配、被支配の関係が言葉の本来の意味の自立を奪ってしまったのである。植民地時代に「ヨボ」は、日本人が朝鮮人に対して用いた蔑みのことばだった。それで、日本の女が、ヨボさんといってどうして悪いのだと言ったが、「ヨボ」という言葉が植民地支配下の当時に日本の女に使われた時、朝鮮青年にとって愛情のこもったこの呼び方は、侮蔑の意味になってしまうのである。焦燥する民族と、どうであれ、統治する優越にある民族の相克は隠語において敏感である¹⁷。そしてこの朝鮮青年は日本人の女に正当に抗議しているのである。他国でもない、自分たちの朝鮮の地にいながら、朝鮮人であることを恥ぢねばならないこの朝鮮青年の傷みはいったいどこからくるものであろうか。そして、自己を認められず、他人であることがむしろ光榮に思っている朝鮮青年の逃避心理は、いったいどこからくるものであろうか。

この小説の場面のような差別用語によるトラブルは、朝鮮半島内だけではなく日本国内でも起っていた。1921年4月29日の「大阪朝日新聞」（廣島山口版）¹⁸には、次のような記事が載せられている。

ヨボと云つて鮮人に毆らる

呉市西湊町漁夫中濱傳一（二十二歳）は、二十七日夜九時頃入浴の歸途同町街路で吉浦道路工事に従事中の朝鮮人土方同町三木誠太郎方止宿関弼仁（三十歳）と出會しヨボと呼んだ為関は立服し折柄其場を通行中の同じ土方金泳述（二十一歳）外数名も交つて傳一を袋叩きにしたのを呉署の知るところとなり太田警部補は数名の巡查と共に現場に急行し右加害者二名を取り押さへたが他の逃走者も目下捜査中である。（呉）

時期的に、小説に出てくる電車内論争の2年前のことである。だが、朝鮮半島内でもなく日本国内で、「ヨボ」と呼ばれたため、袋叩きまでしてしまったこの事実は、当時の朝鮮人が日本人による差別用語に対して、いかに敏感であったことを表しているのである。

「ヨボ」という言葉に関して、趙教英は別の出来事に出会うことになる。

ある日、府会議員の選挙演説の監視に出かけた時、何人かの内地人候補者の演説について、たった1人の朝鮮人候補の演説がはじまる。相当内地人にも人望があった彼は、巧みな日本語で自分の抱負を述べたてていた。すると「廿にもならぬ位」の1人の小僧が立上って「黙れ、ヨボの癖に」と怒鳴った。その時彼は一段と声を高くして

「私は、今、頗る遺憾な言葉を聞きました。しかしながら、私は私達もまた、光榮ある日本人であることを、飽く迄信じて居るものであります。」

日本人による朝鮮人への蔑視や差別感、それに卑屈に対応する朝鮮人の無気力さ。日本人社会へすり寄り、朝鮮人であるということを忘却、または隠蔽して、植民地支配の権力の末端に連なろうとする「候補者」のような朝鮮人たち、この作品は、はっきりとそうした「植民地人」の悲劇を描き出そうとしている。

趙教英は、電車の中の青年と彼とは全く別の方向に生きている候補を比べてみる。それからそのように朝鮮人を引きさいている「日本という国」とは

いったい何なのか考えてみる。そして朝鮮という民族を考えてみる。趙教英は「何か忘れものをした時に人が感じる」ような落ち着かない状態であり、果されない義務の圧迫感に悩まされるのだが、それがどこからくるのかを尋ねない。真実を知ることが恐ろしかったからである。しかし彼は自ら追い討ちをかける。

では、なぜ怖いのだ？なぜ？

趙教英は、妻子の生活を守るという口実以外に、自らの怯懦を感知して慄然とする。しかし、彼は既に、覚醒の一手手前まで来ているのである。ところが、一人の立派な日本人紳士に丁寧に接してもらった後、一つの大発見をして、彼は愕然とした。子供が大人に少しでも真面目に相手にされると、すっかり喜ぶように、喜んでしまった自分を見出し、

これは俺一人の問題ではない。俺たちの民族は昔からこんな性質を持つやうに歴史的に訓練されて来て居るんだ一。

と考える。ここには、己ひとりの問題から出発し、自分達の民族を全体的に、歴史的に考え直そうとする広い視野と正しい認識の芽が萌え出している。

自分を自分として生きていない不安と抑圧感、趙教英の圧迫感はそれであったが、趙教英の圧迫感が二十倍の重みではねかえってくることが起こる。

総督¹⁹が東京からやって来た。「厚い黒い外套に包まれて肥満した総督の人なつこい童顔が降車口から現われた。すると出迎への役人達は一斉に機械のように頭を下げた。総督は鷹揚にそれに会釈して用意の自動車に乗りこんだ。…するとその時だった。突然群集の中から白衣にハンティングを着けた男が躍り出したかと思うと、やにわにピストルを持った手を伸ばして前の車をめがけて引金を引いた。弾丸は発なかった。男はあわてて第二の引金を引いた。今度は轟然たる音響と共に弾丸が後の車の硝子を破壊して斜めに車内を横ぎって炸裂した。と気のついた二台の自動車は急に速度を増して、疾駆し去った。」男はしばらく警官とにらみ合っていたが、自分からピストルを投げ捨て

て趙教英の手に捕えられた。「彼の腕を捕へて居た趙教英はとてもその眼付に堪へられなかつた。その犯人の目は明らかにものを言っているのだ。教英は日ごろ感じている、あの圧迫感が二十倍もの重みで、自分を押し付けるのを感じた。捕はれたものは誰だ。捕へたものは誰だ。」

中島敦の朝鮮、朝鮮人を見る眼は、日本人のいわゆる差別的、同情的視点から描く像ではない。この作品では、一つの民族が他民族に支配され、本来の自由と自立を奪われることを否定し、それに抵抗する人間を肯定する中島敦の姿勢が見られている。こんな姿勢は、この作品の中の挿話として入っている関東大震災の時の朝鮮人殺害をどのように受けとめたかによってもわかる。

東京に出かけた夫が震災によって死んだと思っていた娼婦・金東連は、一人の客から地震の時の朝鮮人大虐殺事件について教えられる。泣き明かした彼女は、夜明けの街を大声で叫びながら駆け回る。

「—みんな知つてるかい?地震の時のことを。

—それでね、奴等はみんな、それを隠して居るんだよ。ほんとに奴などは。」

髪をふり乱し、寝衣1枚で彼女は叫んだが、ついに巡査が来て彼女を捕える。巡査に向って彼女は叫んだ。

「—何だ、お前だつて、同じ朝鮮人のくせに……お前だつて……お前だつて……」

金東連の叫びは、お互いに同じ民族でありながら捕えるものと捕えられるものにひきさかれねばならないことを強要する日本に対しての怒りであるだろう。しかし、彼女の憤怒も抗議も、刑務所という機構の中に吸い込まれていき、彼女の消えた後の横町では、また以前と同じように「真黒な生活が腐った状態のまま続けられている」。趙教英の破局もやってきた。日本人中学生と朝鮮人生徒の喧嘩の懲戒についての不公平な処置で課長と言い争ったことで、趙教英は巡査の職からくびきりになる。彼は妻子の青白い顔を思い浮かべる一方で、あるグループ(地下組織)のいる部屋の情景を思い描く。皆が、

前途の希望に燃えているようなあのグループと、自分の惨めさを較べ、

「どうにかしなくてはいけないのだ。とにかく—」と彼は思う。そして、街角でごろ寝しているチゲ²⁰をみて、その中の一人を揺り起こそうとし、遂に彼の悲憤はあふれ出る。

「お前は、お前たちは」突然なんとも知らぬ妙な感激が彼の中に湧いてきた。彼は一つ身を慄すと、彼等のボロの間に首をつつこんで泣きはじめた。

「お前たちは、お前たちは。この半島は……この民族は……」

作品は、趙教英のこのような嘆きで終わるが、中島敦はこの作品の場面の合間に感覚的に捉えられた、外界描写をはさみ込んでいる。一例をあげよう。

銅色の太陽は其凍つた十二月の軌道を通つて、震へながら赤く禿げた山々に落ちて行つた。北漢山は灰色の空に青白く鋸形に凍りついて居る様に見えた。其頂上から風が光の様にとんで来て鋭く人の頬を削いだ。全く骨も砕けて了いさうに寒かつた。(略)

雪は余り降らなかつた。路はカチカチに凍り固まつて了つた。其路の上を色々な足が滑つたり、転んだりして歩いて行つた。

朝鮮人の船の様な木履。日本のお嬢さんのピカピカした草履。支那人の熊の足の様な毛靴。今にも転びさうな日本の書生の朴歯。磨き上げた朝鮮貴族学生の靴。元山から逃げて来た白色ロシア人の踵の高い赤靴。それから足も大分出かかつた担手—荷物を背にのせて運搬する朝鮮人—のぼろ靴。まれにはいざりの乞食の膝から下の断たれた大腿部。その足は寒さのため、街頭で赤くはれ上つて居た。

一九二三年。冬が汚なく凍つて居た。

凡てが汚なかつた。そして汚ない儘に凍りついて居た。殊にS門外の横町ではそれが甚しかつた。

支那人の阿片と蒜の匂ひ、朝鮮人の安煙草と唐辛子の交つたにほひ、南京虫やしらみのつぶれたにほひ、街上に捨てられた豚の臟腑と猫の生

皮のにほひ、それ等がその臭気を保つたまま、此のあたりに凍りついて了つて居る様に見えた。

朝鮮人、日本人、支那人、白ロシア人の靴の群れを描いたこの描写は、まるで映画のクローズ・アップの手法によつたものと言ってもよいだろう。このような描写は、作品に暗いイメージを与えると同時に中島敦の「国際感覚の敏感さ」、「色彩感覚の鋭さ」²¹も見せてくれるのである。

作品の主人公・趙教英は、巡查という、いわば大日本帝国側に立つ職業に従事し、同胞朝鮮人を取り締る側にいる。と同時に妻と子供のために働かなければいけない朝鮮人としての生活を送るという、二つの世界の中間に位置する不安定な立場に立つ人物である。こんな立場であるからこそ、植民地支配下、屈辱を受けた民族の煩悶がより生々しく描かれたのである。

この作品の中では、趙教英の祖国や民族の運命への覚醒と嘆き、金東連の怒りが素朴に生かされている。しかもそれは、特定のイデオロギーのプロパガンダではないことに注意しなければならない。中島敦が、中学校時代を過ごした京城で、素直に歪められることなく現実を直視した成果がここには生かされている。幼少から小学校を何度も転校し、京城まで行った彼には、彼自身が認めた「彷徨を好む気質」²²とともに、コスモポリタンとしての目が養われたであろうと考えられる。

中島敦は、「人間存在」という抽象的な問題から出発したのではなく、具体的状況の中に生きる人間を問うところから出発したのである。しかもその場合、一つのルートから追求するのではなく、複数のルートから問題を掘りさげ核心に迫る方法を用いている。趙教英と金東連とは、小説の中で、交渉を持つことはない。この交渉のない二人を共時的に造型することによって多層的に対象を把握しようとする態度、方法の中島敦は志すのである。第3章はじめの、やや唐突と思える挿話—朝鮮人学校の日本人校長の矛盾した心や、日本史の征韓の役を教える教室の情景—の意味、また、腕に注射をして稼いでいる東連の友人・福美という娼婦の点描の効果も、この方法を理解することによって明白にされるのである。短編の中に、大きな事件—関東大震災の時の朝鮮人虐殺事件や朝鮮独立運動が組み込まれていて、当時作者の植民地

朝鮮に対する痛い思いとともに朝鮮社会、朝鮮人への関心が表れている。

4. おわりに

「日韓併合の直前に生まれた中島敦は、思えば宗主国の子弟として植民地で育った最初の世代に属していた。そして外地育ちのこの世代こそ、閉ざされた日本の社会に懐疑精神と異文化にかかわる新しい視点を持ちこんだ最初の人々であった」²³。渡辺一民の言った通り、植民地朝鮮で育った中島敦は、内地育ちの人々とは異なった感性を持っていたのである。

少なくとも中島敦は、「植民地」に生きていること、存在していることについての自覚や自己意識を手放すことはなかった。それは、宗主国人の子弟として、コロンの子どもとして存在している自分へのこだわりと同時に、自分たちのいる本来の土地や場所において、被植民地の人間として生きている朝鮮人たちの屈折した生き方にも、眼を向けたものだった。

したがって、この作品では人間存在一般という抽象的な仕方ではなく、より現実的に朝鮮人の心の在り方が、支配側の「大日本帝国人」の側からでなく趙教英や金東連からとらえられている。すなわち、日本植民地統治下、被支配者でありながら目覚めゆく朝鮮人の視点、立場から書き出し、そこに朝鮮人自身の問題を提示したのである。

作品では、朝鮮人としての在り方、祖国や民族への愛情、嘆きという大きな共通の基盤の上に、趙教英と金東連の別々の視点が成立し得た。

イデオロギーが先行する傾向があるその時期、中島敦のこの作品に見られる社会意識の広さ、公正さは彼が植民地朝鮮の現実から学びとったものなのである。

中島敦の作品²⁴には、「自苦」に向けて発動された特徴的なものがある。語り機能は、他を責めないで自己を責める。「自苦」の論理は常に内向きである。植民地に対しての中島敦のこんな姿勢は日本近代文学のなかでも特筆すべき事だと思われる。

「巡査の居る風景」が、一高時代の習作ながら、反植民地主義的な性向を持った作品であることは明らかだろう。

註

- 1 『現代日本文学年表』吉田精一編、1965年
- 2 朴春日の『近代日本文学における朝鮮像』(未来社、1969 [増補版: 1985年])、鶴見俊輔の『朝鮮人の登場する小説』、高崎隆治の『文学のなかの朝鮮人像』(青弓社、1982年)、桑原武夫編『文学理論の研究』(岩波書店、1975)など。
- 3 朴春日の『近代日本文学における朝鮮像』には朝鮮関連の数多くの作家、作品が扱われているが、中島敦は名前も出ていない。ほかの研究論文にも中島敦は言及されていない。
- 4 『中島敦全集 2』(2001年12月 筑摩書房) 「プールの傍で」 p 223
- 5 中島敦の父は、地方回りの中学校教員として一生を終えたが、彼の経歴を眺めていて気になるのは、その転勤の多さで、退職するまでに8校を歴任している。それも東京から千葉県へ、千葉から奈良県へ、奈良から静岡県へと、とうとう、ところ定めず転々としているのである。老境に近づいてから朝鮮の中学校に移り、さらに大連の中学校に転じて、そこで退職している。
- 6 洗春海の回想によれば、龍山小学校からは龍山中学校への進学がほとんどで、京城中学校へ行ったのは中島敦と洗春海二人だけだった。
『中島敦・光と影』田鍋幸信編著 平成元年、新有堂 「龍山小学校からのこと」 p 191
- 7 『中島敦・光と影』田鍋幸信編著 平成元年、新有堂 「中島君を憶う」山崎良幸 p 186
- 8 『中島敦・光と影』田鍋幸信編著 平成元年、新有堂 「三角地のことなど」杉原忠彦 p 192
- 9 「敦と私」昭和35年6月20日『ツシタラ 3』
- 10 『昭和作家のクロのトポス 中島敦』勝又浩、木村一信編 1992、双文社 p 23
- 11 「虎狩」は昭和9年の初めに脱稿し、『中央公論』の懸賞小説に応募、同年7月の発表で選外佳作となった作品である。
- 12 『中島敦・光と影』田鍋幸信編著 平成元年、新有堂
- 13 『中島敦・光と影』田鍋幸信編著 平成元年、新有堂
- 14 小山政憲の回想によれば中島敦は中学校3年生の時、京城中学校の『校友会雑誌』に漢詩と所感のようなものを出した。(まだはっきりしてない)
『中島敦・光と影』田鍋幸信編著 平成元年、新有堂 「校友会雑誌その他のこと」 p 198
- 15 原文は『中島敦全集 2』(2001年12月 筑摩書房) による。

- 16 渡辺一民『中島敦論』 2005年3月 みすず書房 p20
- 17 植民地時代に日本人による「ヨボ」や「チョンガー」という差別用語に対して朝鮮人による報復の言語「ウエノム」「チョッパリ」があった。
- 18 広島大学中央図書館所蔵 「大阪朝日新聞」大正十年四月二十九日版
- 19 1923年の朝鮮総督は齋藤実だったが、彼は総督として着任したとき（1918年）南大門駅で爆弾を投げられたことはあるが、この作で描かれたような事実があったかどうか確認できていない。朝鮮総督暗殺未遂事件は、1911年の寺内正毅の時もあった。
- 20 荷物をのせ人が背負って運ぶ運搬用具。チゲ担ぎは都市細民の糊口の道であった。
- 21 渡辺一民『中島敦論』 2005年3月 みすず書房
渡辺一民は中島敦の後の作品「北方行」研究で、「国際感覚の敏感さ」、「色彩感覚の鋭さ」と指摘したが、このような特徴は「巡査の居る風景」にすでに表れている。
- 22 中島敦全集1『斗南先生』 2001年、筑摩書房 p44
- 23 渡辺一民『中島敦論』 2005年3月 みすず書房 p219
- 24 中島敦の「巡査の居る風景」以外の作品—「虎狩」にもこのような特徴が見られている。

(riei213@hotmail.com)